

モーツァルトの家系と家族と息子たち

海事研究家

神戸モーツァルト研究会会員

大阪大学/神戸大学非常勤講師 野澤和男

- § 1. モーツァルトの家系
- § 2. モーツァルトの家族
- § 3. モーツァルトの結婚と
息子たち



ヨーゼフ・ランゲ作 : 鍵盤に手を置くモーツァルト(首より下未完成)、
妻コンスタンツェいわく “モーツァルトに最もよく似た肖像である。”

はじめに

世界人口70億6,680万人の現在、この地球上で最も知られている人、それは恐らく「モーツァルト」であろう。幼稚園の園児から100歳を越える老人まで多くの人が写真を示され、また音楽を聞かされると口元が緩んで即座に出てくる言葉、それは「モーツァルト」である。モーツァルトは新星のように忽然とこの世にあらわれ、その子供の代で忽然として家系は絶えた。ハーバート・クッファーバーグは次のように書いている。

①「モーツァルト一族は、バッハ一族と違って、いかなる音楽王朝も築かなかった。この一家は驚く程、突然に現れ、そして消えて行った。父レオポルトはヴァイオリン奏者で、この楽器の提要を残している。作曲家、音楽家として最高だったヴォルフガングは多くの作品を残したが（息子の6番目4男フランツ・クサヴァー（モーツァルト二世）一人、音楽家になったものの）（括弧は筆者による）音楽家の子孫はほとんど残さなかった。・・・」

②「生物学的、心理学的、また音楽的な面でヴォルフガングは、父レーオポルトなしにはあり得なかったであろう。父親と息子の相互作用は人間現象の極めて不可解かつ興味ある一面だが、その複雑な関係をモーツァルト父子ほどあざやかにみせている例はめったにないと言っている。・・・」

（出典：ハーバート・クッファーバーグ：アマデウスーモーツァルト点描一、音楽之友社）

この空前絶後の巨匠はどのような祖先・家系のもとに現れ、どのような家族をつくり、どのような子孫を残していったのであろうか。

§ 1. モーツァルトの家系

アウクスブルク:

モーツァルトの父レーオポルトの故郷であるアウクスブルクはザルツブルクのほぼ西方170 kmにあり、かつて、フッガー家の拠点として栄えた帝国都市で中世以来の名高い町である。現在は、シュヴァーベン地方、すなわち、バイエルン州の一地方都市として現在、人口二十数万の工業都市である。モーツァルトの父レーオポルトは1719年11月14日、市庁舎から北にむかい、大聖堂を右に見て更に北に進んだフラウエントーア通りの4階建の建物（現在モーツァルト記念館）で生まれた。

家系研究によりモーツァルト家がここシュヴァーベン地方で広く活躍した芸術家一族であることが明らかにされた。



モーツァルトという姓: 1330年頃のシュヴァーベン公国（現バンエルン州）に遡り、現在でも、レヒ川、ドナウ川、アルゴイ高地地方に点在する。モーツァルトの父方の祖先もこの地方に源を発している。後に見るように、元来、**モッツハルト (Motzhart, Motzhardt)** という綴りで記録が残っており、その意味は「みすぼらしい奴、卑しい奴」とか「沼地の藪」というような意味であったが、曾々祖父**ダーヴィット・モーツァルト (David Mozart: 1620-1685)** の時代からモーツァルト (Mozart) と表記されるに至った理由は語義が与える消極的イメージからの脱却が絡んでいるのではないかとの説もある。

モーツァルトの父方の祖先の地方



http://en.wikipedia.org/wiki/Leopold_Mozart
http://en.wikipedia.org/wiki/Mozart_family

モーツァルト家の祖先:

参照: 次ページ モーツァルトの家系図(渡辺千栄子作成)

モーツァルト家のルーツはアウクスブルク¹⁾の西方地方あり15世紀には既に名前が残される。1486年まで生きた**エンドリス・モッツハルト**(Ändris Motzhart)は**農夫**で、その子孫は**農夫**、**傭兵**となり6代目**ペーター・モッツハルト**(Peter Motzhart:1570以前—1618)は**大工**、**地主**とある。その子供の**ダーヴィド・モッツハルト**(David Motzhart:1596以前—1625)は**建築職人**となり、以降、**建築家**や**彫刻師**など**芸術家の家系**として発展する。

ダーヴィト・モーツァルト(David Mozart:1620-1685父レーオポルトの曾々祖父)は**建築師**として**バロック建築**の建造に携わるようになる。彼の時代に姓の綴りが**Motzhart**から**Mozart**に変わっている。その二人の息子の**ハンス・ゲオルグ・モーツァルト**(Hanns Georg Mozart:1647-1719)と**フランツ・モーツァルト**(Franz Mozart:1649-1694)は**建築師(煉瓦職人)**で**石工の親方**、三番目の息子**ミハエル・モーツァルト**(Michael Mozart:1655-1718)は**彫刻師**であった。特に、**ハンス・ゲオルグ**は**大工の棟梁**で**ツンフト²⁾**の親方であり**ザンクト=ゲオルグ司教座教会**を建て、**フッガー家³⁾**の協力者であった。**フランツ**(モーツァルトの曾祖父にあたる)は**フッガー家**の建造した世界最古の社会住宅 Fuggerei、長屋である**フッゲライ⁴⁾**の一軒に住んでいたが、現在も彼の一家が居住したことを記念する銘板が残されている。**フランツ**の長男**ヨハン・ゲオルグ**(1679-1736)は**製本師**でアウクスブルク教会の近くに住み、次男**フランツ**はザルツブルク北方のシュトラウビングの有名な**彫刻師**であった。**ヨハン・ゲオルグ**は**織物師****クリスティアン・ズルツァー**の娘**アンナ・マリーア・ズルツァー**

(Anna Maria Sulzer)と結婚した。彼女の家系は同じく1600年ごろから代々続いた織物師の家系であった。

ヨハン・ゲオルグは8人の子供をもったが、その第1子長男がヴォルフガングの父ヨハン・ゲオルグ・レーオポルト・モーツァルト (Johan Georg Mozart:1719-1787)である。1719年11月14日にフラウエントーア・シュトラッセ30番地の家で生まれ前掲のモーツァルト記念館になっている。

レーオポルトの弟に彫像師フランツ・アーロイス・モーツァルト (Franz Alois Mozart:1727-1791)がいる。彼の娘がヴォルフガングの従兄妹でベーズレ書簡でも有名なマリーア・アンナ・テークラ・モーツァルト (Maria Anna Thekla Mozart:ベーズレ:1758-1841)である。



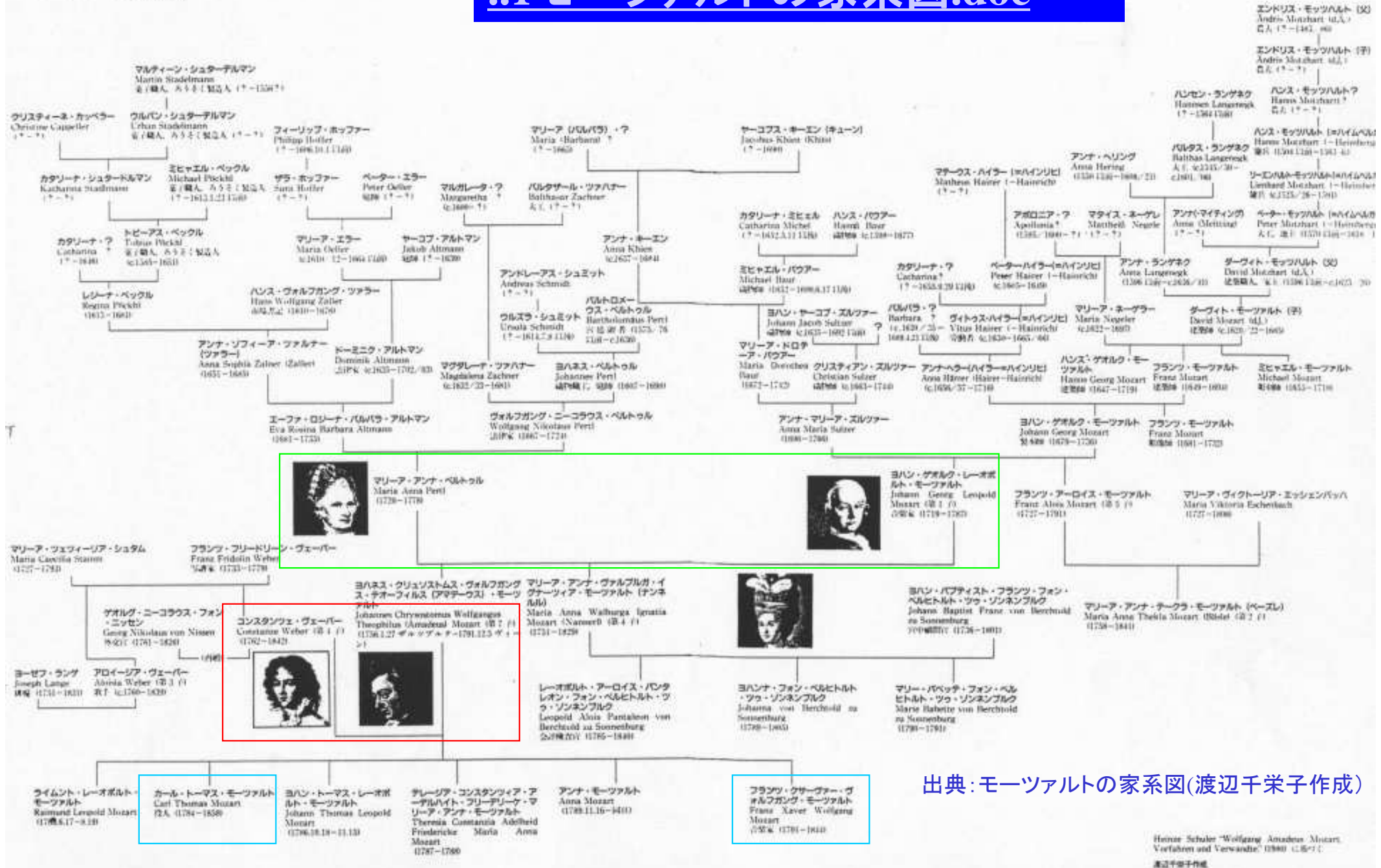
Maria Anna Thekla Mozart. Self-portrait in penci

http://en.wikipedia.org/wiki/Maria_Anna_Thekla_Mozart



フッゲライ

..¥モーツァルトの家系図.doc



出典:モーツァルトの家系図(渡辺千栄子作成)

①17～18世紀のヨーロッパ

1 : 24,000,000



モーツァルト家の生きた時代
各国の版図

出典：帝国書院，
高等学校世界史地図

注1) アウクスブルク：ローマ皇帝アウグストゥスの名前が町の名の由来で、紀元前1cにローマ人によって造られた町でありBC15年、ローマ帝国の属州の州都となった。ドイツとイタリアを結ぶ通商、軍用道路上の拠点となる。AD8c末には司教座が置かれ、ドイツ人の教会を中心とした町づくりが始まった。AD11c半ばに市場権と硬貨鑄造権、12c初め、皇帝から都市の特許状GA与えられ繁栄し商人が力を付け、帝国自由都市の地位を獲得した。16cにかけてバルヒェン織りの布地をイタリアや東方へと輸出。

フッガー家はバルヒェン織りで巨額な財を成した。金融業で皇帝やローマ教皇、大司教、貴族を相手に戦費や選挙資金を貸し、その借金の方を取ったヨーロッパ各地の鉱山、銅山、錫鉛の鉱山を開発して、巨額の富を築いていった。フッガー家や同じくアウクスブルクの豪商であったウェルザー家などがヨーロッパ中で商いを行フッガー家や同じくアウクスブルクの豪商であったウェルザー家などがヨーロッパ中で商いを行い、ヨーロッパの政局を左右するほどに力を持った15c～17c頃がアウクスブルクの全盛時代。

注2) ツンフト：ドイツで、12、13世紀ごろから結成されはじめた独占的、排他的な手工業者の同職組合。手工業の同職仲間が、商人ギルドに対抗して結成した手工業ギルド。同職組合。

注3) フッガー家：15C末南ドイツ銀山を独占経営したアウクスブルク (Augsburg) の巨商。16C初め皇帝や教皇をも金融支配した。前期的金融資本の典型 16C後半没落。

注4) フッゲライ：Fuggerei16世紀のドイツの都市アウクスブルクに設置された低所得者のための集合住宅である。フッガー家によって建設されたためこの名がある。世界最初期の計画的集合住宅として知られる。

レーオポルトは8歳のときにアウクスブルクのギムナジウムの聖ザルヴァートル・イエズス会学校に通った。頭は並みはずれて明晰であったという。その後、聖ザルヴァートル校に入学し、古典、文学、科学の教育を受けると共に、聖ヨーゼフ神学校で音楽教育を受け、オルガンとヴァイオリンを学んだ。

彼の音楽的才能は非常に幼いときから芽生え、St.Ulrich and Heilig Kreuzの教会合唱団で、また“金色の小劇場“と呼ばれる劇場で開催される学校のイエズス会の演劇会でしばしば歌った。町のコメディ劇場は彼にイタリアオペラを聴く機会と名歌手の演劇を鑑賞する機会を与えた。

しかし、1737年、父ヨハン・ゲオルグの死後、彼は誰もが予期しなかった選択をした。アウクスブルクの神学コースに進まずに自ら希望して一族で初めて、つぎの第三段階の高等教育を受けるためにザルツブルクに旅立った。しかし、彼はアウクスブルク市民としての市民権を継続して議会に認めさせている。ザルツブルクの音楽指揮者になってからも弟フランツ・アロイスと緊密な連絡を取った。また彼はアウクスブルク在住でレーオポルトの「ヴァイオリン教程」の出版者 Johann Jakob Lotter(1727-1792) や フォルテ・ピアノの製作者 Johann Andreas Stein(1728-1792)とも知り合いになり何度か手紙を書いている

彼はまた、彼の音楽を演奏したCollegium Musicum(民間音楽愛好団体)やMonastery of Heilig Kreuz(修道院の聖なる十字架)と接触を保った。なお、1759-1775年には後にザルツブルクで彼の雇うことになるHieronymus Graf Colloredo(コロレード大司教)がアウクスブルクのSt.Moritz Churchの長となっている。

ザルツブルクのベネディクト派大学で哲学と法学を学んだがその後、大学への出席率が低下したことで退学処分になる。1739年ザルツブルクの名門貴族・大聖堂参事会員トゥルン=ヴァルサッシーナ・タクシス伯爵の従僕兼楽師として召しかかえられ音楽家としての道を歩み始める。作曲技法のあらゆるスタイルを習得、教会では礼拝の時のヴィオリンを弾くようになる。

レーオポルトは、肖像画からも推察されるように、ハンサムで性格も良く、博覧強記で、しかもさりげない顔をしながら、ウイットに富んだ会話、皮肉まじりのユーモアがあり、教師としても優れていたという。1743年自作「教会及び室内のためのトリオソナタ」作品1を発表する。このような忠勤ぶりと音楽的能力が認められ、ザルツブルク大司教の宮廷楽団の第4ヴィオリン奏者となる。

§ 2. モーツァルトの家族

2.1 父レーオポルトと母マリーア・アンナ

モーツァルトの父レーオポルトは28才の時の1747年、ひとつ年下のマリーア・アンナ・ペルトウル (Pertl, Maria Anna : 1720 - 1778) と結婚した。新婚生活を始めるためにザルツブルクのローレンツ・ハーゲナウアー館のワンフロアを借りた。三部屋のうち、窓際の部屋がレーオポルト一家の居間でその奥が子供たちの生まれた部屋であったという。マリーア・アンナは3男4女の計7人の子供をもうけたが、そのうち5人は出産直後あるいは1年後に亡くなり、成人したのは4番目の三女マリーア・アンナ (Mozart, Maria Anna、通称ナンネル ; 1751-1829) と7番目三男で稀代の巨匠となるヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (Mozart, Wolfgang Amadeus : 1756-1791、以下、モーツァルトと略記) の二人である。



モーツァルトの父母と姉



ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト



少年時代のモーツァルト。右
＝グルーズ作、ルーヴル美術
館蔵、左上＝7歳のモーツァ
ルト、モーツァルテウム蔵、
左下＝パリ国立図書館蔵

少年時代のモーツァルト



モーツァルトと姉ナンネル
Wolfgang and Nannerl Mozart, c. 1763, by Eusebius
Johann Alphen (1741–1772)

母マリーア・アンナは1720年、ザルツブルクのほぼ東方25 kmに位置するザルツカンマーグート地方の小村、ヴォルフガング湖のほとりにあるザンクト・ギルゲンにて、父親ヴォルフガング・ニーコラウス・ペルトウル(1667-1724)と母エーファ・ロジーナ・バルバラ・アルトマン(1681-1755)の間に生れた。父親ヴォルフガング・ニーコラウスもまた一族で初めて高等教育を受けた人物であった。彼はザルツブルクのベネディクト派大学で法学を修めたが、在学中に合唱隊のバス・パートをつとめ、聖ペテロ修道士学校の歌唱指導を行っていた。卒業後、ザンクト・ギルゲンの管理官を勤めた。父方の家系図によると1600年頃から記録され、大工、宮廷御者、織物職、庭師と続き彼女の父が法律家となった。

一方、母方エーファ・ロジーナの家系は1550年ごろから記録され、菓子職人、ろうそく製造人、庭師、市場書記そして祖父が法律家であり、勤勉で発展的な家系で高級職を得た法律家同士の血筋の結婚であった。父の死後、マリーア・アンナの一家はザルツブルクに戻り、モーツァルトの生家に近いアパートに移り住んだ。彼女は陽気でユーモアたっぷり、無邪気で正直な人であった。ヴォルフガングの陽気な性格は母親譲りと言われる。

1763年6月モーツァルト一家はヴォルフガングとナンネルの演奏旅行としてアウクスブルクを訪ねた。彼らの到着はアウクスブルクのトピックとなった。市庁舎、St. Salvator Grammar SchoolやSt. Ulrich Churchを訪ねた。ヴォルフガングらの叔父であるフランツ・アーロイスと4歳年上の従妹マリーア・アンナテークラ・モーツァルト(通称ベーズレとして有名)を紹介された。モーツァルト一家にとって家族全員で旅行した最も幸福な日々であったと言える。



ヴォルフガング湖畔にて
(1999)



ザンクト・ギルゲン役場
(1999)



上：母アンナ・マリア
の生家

下：庭先にあるナンネル
の像
(1999年撮影)



生家の壁面に描かれた
母アンナ・マリアとナンネルの
レリーフ (1999年撮影)





亡き母親の肖像画が見守る家族奏楽の絵 (1780年：ヨーハン・ネーポムク・デッラ・クローチェ(1736-1819))

§ 3. モーツァルトの結婚と息子たち

ボルフガング・アマディウス・モーツァルトは1756年ザルツブルクに生まれ、1791年ウィーンで死んだ。モーツァルト35歳の短い生涯で17回の旅をしたが驚くべきはその旅行期間で約10年（人生に約1/3）であった。この「旅するモーツァルト」については別稿で述べることにする。

モーツァルトの生涯は大きく、**ザルツブルク時代**、**ウィーン時代**の2つに分けて考えると分かりやすい。即ち、

①ザルツブルク時代（1756～1781）

モーツァルトの幼年時代から青年時代にあたる。父レーオポルトがモーツァルトの音楽の神童ぶりを発見し、家族ないし父親と演奏旅行に出かけた幼年時代と、ザルツブルクを嫌ってミュンヘン、マンハイム、パリと就職先を求めた青年時代。この旅行では同行した母親がパリで客死する悲しみ、ソプラノ歌手**アロイージャ**との**失恋**（彼女は宮廷俳優・画家のヨーゼフ・ランゲと結婚）、そして後に妻となるコンスタンツェとの出会いがあった。ザルツブルクへ戻り意に沿わぬ宮仕で過ごした25年間の時代であった。



アロイージャ・ヴェーバー

②ウィーン時代（1781～1791）

コロレード大司教との確執の末、ザルツブルクに別れを告げウィーンに移住する。そしてフランツ・フリードリヒ・ヴェーバーの3女コンスタンツェと結婚し、作曲、コンサート、レッスンで家計を立てる**フリーランス音楽家**になる。一方、コンスタンツェとの結婚を契機として、レーオポルト、ナンネルとの折り合いが決定的に悪くなる。作曲の日々、妻の病、父親・姉との確執…の10年間の時代である。

Year	Age	出来事・旅行等	在住・活動拠点	
1756		1月27日8am モーツァルト誕生 、父レーオポルト「ヴァイオリン教程」出版	Salzburg	
1757	1	父レーオポルト「宮廷内作曲家」の称号		
1758	2	父レーオポルトザルツブルグ宮廷楽団次席ヴァイオリン奏者		
1758	3	父レーオポルトナンネルの楽譜帳、ヴォルフガング		
1760	4	クラヴィアのレッスン始まる。		
1761	5	クラヴィアのレッスン続ける。		
1762	6	ミュンヘン旅行		
		ウイーン旅行		
1763	7	帰郷、レーオポルト宮廷楽団の副楽長		
		西方への大旅行		
1764	8	英国に渡る		
1765	9			
1766	10	アムステルダム訪問 パリ訪問、帰郷		
1767	11	ウイーン旅行2		
1768	12			
1769	13	帰郷 父とイタリア旅行		
1770	14			
1771	15	帰郷 イタリア旅行2		
1772	16	イタリア旅行3		
1773	17			
1774	18			
1775	19			
1776	20			
1777	21	母とメインハイム・パリ旅行(母客死)		
1778	22			
1779	23	帰郷		
1780	24	ミュンヘン旅行		
1781	25	ウイーン定住	Wien	
1782	26	コンスタンツェと結婚	次男カール誕生	
1783	27	ダ・ポンテ、ザルツ帰郷		
1784	28	ナンネル結婚		
1785	29	父ウイーン訪問		
1786	30	プラハに招かれる		フィガロの結婚
1787	31	プラハ再訪		アイネクライネナハトムジーク
1788	32			交響曲39,40,41
1789	33	リ公爵とプラハ、ドレスデン、ライプツィヒ、ポツダム、ライプツィヒ再訪		
1790	34	フランクフルト訪問		コシファントウツテ、
1791	35	ジスマイヤーとプラハ訪問		魔笛、レクイエム
		12/5 0:55 モーツァルト死亡		四男フランツ・クサヴァー誕生

モーツァルトの生涯年表

1782年8月4日ヴォルフガングはレーオポルトの同意が得られないまま、ウィーンの聖シュテファン大聖堂でコンスタンツェ・ヴェーバー（歌劇「魔弾の射手」の作曲家カール・マリア・フォン・ヴェーバーの23歳上の従姉）と結婚式をあげた。彼らの間にはつぎつぎと子供が生まれた。しかし、長男ライムント・レーオポルト、三男ヨハン・トーマス・レーオポルト、長女テレジア、次女アンナの4人は不幸にも同日か半年後までに早世している。生きながらえたヴォルフガング直系の子は2番目次男カール・トーマス・モーツァルト（Karl Thomas Mozart）と6番目4男フランツ・クサヴァー・モーツァルト（Franz Xaver Wolfgang Mozart）の2人である。



晩年のコンスタンツェといわれる女性（前列左端）



コンスタンツェ・モーツァルト（旧姓ヴェーバー）



モーツァルトの息子カール・トーマスとフランツ・クサヴァー

モーツァルト愛好家なら誰しも胸を打たれる肖像画がある。それは遺児2人カール・トーマスとフランツ・クサヴァーの油絵（写真中央）である。ハンス・ハンセンが1798年ごろ描いた作品といわれるので、カールが14歳、フランツ・クサヴァーが7歳の頃である。兄カールは右手でやさしく弟の肩を抱き寄せお互いに顔を寄せ合っている。カールの左手は弟の右手を握っている。カールは兄らしく落ち着いた表情で微笑み、弟クサヴァーは何か不安そうなまなざしで兄をひたすら頼っているそんな絵である。

http://en.wikipedia.org/wiki/Karl_Thomas_Mozart

http://en.wikipedia.org/wiki/Franz_Xaver_Wolfgang_Mozart



フランツ・クサヴァー



カール・トーマス

カール・トーマス・モーツァルト (1784-1758) :

モーツァルト没後まもなく、7歳の時、ヴァン・スヴィーテン男爵の仲介でプラハのギムナジウムの教授フランツ・ニーメチェックのもとに引き取られ一般教育とピアノ教育を受ける。1797年の13歳までプラハで過ごした。14歳になると北イタリアのリヴォルノの商家に入り商業学校で教育を受ける。ピアノ販売商人になる道を模索するが実現しなかった。1805年暮に再び音楽家をめざした。ヨーゼフ・ハイドンの推薦状を携えてミラノ音楽院院長で優れた作曲家ボニファツィオ・アジオーリに入門して猛烈な勉強を始める。最初の2年間は進歩が目覚しく前途有望視されるが第3年次になると何故か音楽家の道を断念してしまう。1810年ミラノのナポリ副王の役人会計を担当し、以降、北イタリア・ミラノで過ごす。1858年10月、73歳の生涯を閉じる。

フランツ・クサヴァー・ヴォルフガング・モーツァルト (1791-1844)

フランツ・クサヴァーはピアニスト、作曲家となった。父親が他界した年に生まれたため父親から卓越した音楽教育は受けられなかったが、幼くして母親コンスタンツェはフランツ・クサヴァーの楽才を認め音楽家に仕立てあげよう決心したのか、プラハを訪れモーツァルトの旧知であるドウシェク夫妻に幼いフランツ・クサヴァーをあずけた。そして兄同様にフランツ・ニーメチェックのもとでクラヴィーアが教授された。

その後、巨匠モーツァルトゆかりの多くの著名あるいは俊英の音楽家、例えば、ハイドンの弟子ジークムント・ノイコム、父親の愛弟子ヨハン・ネーポムク・フンメル、父親毒殺の噂を立てられたアントーニオ・サリエーリ、ウィーンの優れた音楽理論家ゲオルグ・ヨーゼフ・フォーグラーター、ベートベンの師ゲオルグ・オルブレヒツベルガー等の温かい庇護の下にフランツ・クサヴァーは職業音楽家としての道を進んでいった。

フランツ・クサヴァーの音楽家としてのデビューは1805年4月のヨーゼフ・ハイドン73歳の誕生日を記念したアン・デア・ウィーン劇場での演奏会であった。ハイドンは兄のカール・トーマスの時と同様、終始変わらぬ愛惜と愛情の念を持って親友モーツァルトの遺児を見守っていた。

フランツ・クサヴァーは1808年、ウィーンの母親を離れて旅にでる。ポーランド、ガリシアを経て1811年ロシア・ウクライナ地方のレンベルク（現ルヴォフ）に滞在する。また、1819年には大がかりな演奏旅行に出かける。

ロシア、ポーランド、プロイセン、デンマーク、北ドイツ、オーストリア、イタリア、スイス、南ドイツと周り、1821年オーストリアに入りザルツブルクに立ち戻る

その後、再びレンベルクで音楽活動を続けたあとウィーンに戻り以降はここで音楽活動を繰り広げた。ロベルト・シューマンと親交を結んだ。母親コンスタンツェとは1825年に再会し、1836年にはザルツブルクに移った母親を見舞っている。

「モーツァルト巡礼」 ※1

1829年7月、イタリア人のノヴェロ夫妻（ヴィンセントとメアリー）がザルツブルクを訪問してモーツァルトの姉ナンネル（ゾンネンブルク未亡人）、母コンスタンツェ（ニッセン未亡人）およびフランツ・クサヴァーに面談した際の会話の記録が残されている。当時、モーツァルトは既に亡くなっていたが、姉のナンネルはザルツブルクに住んでいて老いて盲目となり死の病に臥せっていた。熱狂的なモーツァルト崇拝者であったヴィンセント・ノヴェロ（1781-1861）※2 はそれを伝え聞き、ナンネルを慰問し慰めたいとプランをたてた。それは崇拝者仲間に義援金を募りそれを持参してナンネルを見舞い、モーツァルトの縁の人たちに会うことであった。英国を出立しザルツブルクを訪ねたのは1829年7/13-7/17のことであった。

折よく帰郷していたモーツァルトの息子フランツ・クサヴァー（当時38歳）の案内と通訳で78歳の衰弱したナンネルを見舞い、贈り物を渡すことができた。その時の印象が残されている。She was "blind, languid, exhausted, feeble and nearly speechless," as well as lonely.

フランツ・クサヴァーは質素でめったにワインも飲まず食物もごく普通のものであったという。

※ 1) モーツァルト巡礼—1829年ノヴェロ夫妻の旅日記(抄訳)—：ネリーナ・メディチ・マリニャーノ／ローズマリー・ヒューズ 共著 小池 滋訳 (秀文インターナショナル)

※ 2) ヴィンセント・ノヴェロ (1871年生)：イギリスロンドンで楽譜出版社を経営、ピアノ・オルガン奏者で音楽学者。

コンスタンツェは当時、65歳であって目の美しさ意外は美貌はもはや残っていなかったが姿勢はしゃんとして風格もあった。尼僧街の美しい家に住んでいた。彼女の末妹ゾフィー・ハイブルにも会うことができた。モーツァルトは臨終に際して彼女の腕の中で息を引き取ったと言われている。

メアリーは、ウィーンでコンスタンツェの姉である**ランゲ夫人**（**アロイージア・ヴェーバー**：当時69歳、当時ランゲと離婚）にも会っている。往年の美貌オペラ歌手でモーツァルトの**熱烈な初恋の相手**であり、**失恋の相手**であった。

メアリーはその理由についてズバリと尋ねた。「何故、モーツァルトの求婚を断ったのですか？」すると、夫人はつぎのように答えた。「……わかりませんわ。二人の父親は賛成でしたが。私はあの頃どうしても彼を愛することができなかつたのです。彼の才能と愛すべき人柄がわかっていなかったのですね。後で私はとても後悔しましたわ。」**彼女の口調はとても愛情と愛惜の念にあふれていたという。**

モーツァルトがアロイージアに熱烈に求婚してから59年、失恋して妹コンスタンツェと結婚してから47年、そしてモーツァルトの死から38年……、時は白雲流水のように流れ、モーツァルトをとりまく華麗な人々の生き生きとした青春時代を風化させた。ただ美しいハーモニーと語り継がれる思い出のみが漂う。そのようなことを思わせるノヴェロの旅日記であった。

モーツァルト没後50年の1841年に生地ザルツブルクに「大聖堂音楽協会兼モーツァルティウム」という組織ができた。その翌年1842年の3月にコンスタンツェは世を去った。彼は1838年にウィーンからザルツブルクに移住していたが、モーツァルティウムの指揮者となり、Ernst Pauer等のpianistの育成にあたったという。

フランツ・クサヴァーの最後を飾った出来事が1842年9月4日に举行されたモーツァルト像の除幕式と記念音楽祭であった。彼はこの祝祭の主催と演奏を行った。かれが51歳の時のことであった。

この祝典には“ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト2世を襲名したフランツ・クサヴァーと兄カール・トーマスが招待された。その記念音楽祭でW. A. モーツァルト2世は父親モーツァルトの作品を盛り込んだ祝典音楽合唱曲を作曲し演奏した。その歌詞の第一節を示す。



W. A. モーツァルト像の前で(1999年)

『 この場所にその姿をあらわせし巨匠を見よ！

これこそ、彼の人！

これこそ、汝らが愛し、敬慕せし人なり。

音楽の地平線にはるか燦然と輝やく、かくも明るき星を

他の民族がなお誇りうるや！

彼の人には疾く消え失せしが、

その作品は永久に輝やき、

鉦石や大理石よりもなお永く生き続ける。

他の民族がなお誇りうるや。

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

』

W. A. モーツァルト2世は除幕式当夜の第1回祝典音楽祭でフランツ・ラハナーなるミュンヘンの名高い音楽家の指揮の下、父親のとりわけ有名な「二短調協奏曲 (KV466)」を独奏しその見事な演奏に出席者を魅了した。

この演奏はW. A. モーツァルト2世の独奏ピアニストとしての最後の機会であった。また父親の遺産のハンマーフリュゲルをモーツァルテウムに寄贈し、その後も父親の蔵書や楽譜を譲り渡し多額の金銭も寄付した。

彼は翌年1843年冬に病気に倒れ1844年7月29日にドイツ・カールスバート (Karlsbad) の地で53歳の生涯を終えた。

フランツ・クサヴァー・ヴォルフガング・モーツァルトの曲の例

[..¥F.X.Mozart¥F. X. Mozart - Piano Concerto No. 2 in E flat major, Op 25. - \(II\) Andante espressivo - YouTube.wmv](#)

[..¥F.X.Mozart¥Franz Xaver Mozart - Violin Sonata in Bb major III. Presto - YouTube2.wmv](#)

[..¥F.X.Mozart¥Franz Xaver Mozart Klavierquartett in sol min. Andrea Bambace E. P. Q. \(1 2\) - YouTube.wmv](#)

一方、長男の**カール・トーマス**は弟よりも長生した。1856年、**モーツァルト生誕100年祭**が**ザルツブルク**にて大々的に行われたがこの祝祭のために遠路はるばるイタリアのミラノから出席していた。除幕式祭典から既に16年を経過し彼は72歳になっていた。そして寂しいことには既に、**母コンスタンツェ**、**弟フランツ・クサヴァー**は他界していた。

カール・トーマスは小柄で痩せぎすな人物で、黒い目をした、歳のわりに髪は黒く、その物腰は素朴でかつ控えめであった。彼はつぎつぎに演奏される父親**モーツァルト**の名曲の数々を長時間じっと静かに聞き入っていた。

巨匠の子として生まれたカール・トーマスには、幼い頃の優しかった父、幼くして死別した父、死後高まる父の名声と自分の境遇、幼くして別れた母と弟、志半ばで達成できなかった音楽への思慕、そして今は遠いミラノで年老いて孤独に住む自分などを走馬灯のように脳裏によぎらせながら聞いていたのである。

“……父モーツァルトは私に大変注意を払ってくれ、定期的に散歩に連れて行ってくれました。当時、母が病気がちで殆ど家に閉じこもっていましたが……。また、しばしば劇場にも連れて行ってくれました。……このようなことは後年けして探し求めることは出来ませんでした。……”と彼は大変生き生きと音楽評論家に語ったという。

彼は生誕100年祭の2年後の1856年10月31日にミラノで73歳の生涯を閉じた。

兄カール・トーマスも弟フランツ・クサヴァーもともに一度も結婚しなかったために、カール・トーマスの死をもって巨匠モーツァルトの直系の血筋が途絶えた。モーツァルトの没後65年のことであった。



カール・トーマス・モーツァルト
ダゲレオタイプ写真

巨匠モーツァルトの傍系の血統を見てみると、姉ナンネルの息子の系統も1919年で途絶えている。アウクスブルクでは叔父達が続けてきた製本業が1836年まで続くが、その後彼らの子孫は軍人、理髪師、鉄道職員などの職業についた。しかし、このアウクスブルクのモーツァルト・ファミリーの系統も1965年女性服装洋裁師カロリーネ・グラウ（Karoline Grau：旧姓モーツァルト）の死を持って途絶えたと言う。

(http://www.mozartforum.com/VB_forum/showthread.php?t=55)

モーツァルト家は祖先のエンドリス・モッツハルト（1585頃死亡）から長々と続き1965年のカロリーネ・グラウの死をもって約380年の長い歴史を閉じたことになる。



END

